

明日を担う生徒を育てる 「総合的な学習の時間」のあり方

—「表現・コミュニケーション力」に焦点を当てて—

神原一之・神山貴弥*

How to Create “the Period for Integrated Study”

—Remark Communication—

Kazuyuki KAMBARA and Takaya KOHYAMA

Abstract. This study reports on the effects of “the Period for Integrated Study” focusing on “the ability of self-expression and communication” for the 8th and 9th grade students. The students took four courses, “Dictation”, “Image”, “Graph”, and “Body Language”. They recognized the necessity less than the teachers had hoped although they enjoyed studying the courses.

Key words: communication, dictation, Image, Graph, Body Language

I. はじめに

本校では、1999年度（平成11年度）より、必修教科や選択教科との関連を考えながら、教育課程の中にどのように位置づけるのかに焦点を当てながら総合的な学習の時間について5年間実践的な研究を進めてきている。

本年度、特に表現・コミュニケーションに焦点をあてた研究を各教科・領域において開始し、総合的な学習の時間でも講座「表現・コミュニケーション」を新しく設定して、本校生徒の「表現・コミュニケーション力」の育成をめざした。以下、その内容を報告する。

II. 本年度の総合的な学習の概略

本校の総合的な学習の目的は次の3点である。

- | |
|--|
| <p>①自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力をつける。</p> <p>②学び方やものの見方を身につけ、問題の解決や探求活動に主体的、創造的に取り組み、自己の生き方を考える。</p> <p>③表現・コミュニケーション力をつける。</p> |
|--|

* 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター

ここでいう「表現・コミュニケーション力」とは、発信者の一方的な表現ではなく、知識や信念・感情・意思を効果的に伝達しコミュニケーションを成立させる力、つまり、「自分の知識や信念・感情・意思を、相手の状況や社会的立場に応じて適切な媒体を用いて、効果的に表現・伝達する力」(2003 黒瀬ほか)と捉えている。

総合的な学習の時間を、基本的に毎週木曜日の午後2時間、年間70時間実施している。年間指導計画は、表1の通りである。

第2・3学年を対象とした「研究」は5つのテーマ(国際・文化・環境・福祉・くらし)から1つ選択し、2年間継続して学習を進める。「研究Ⅰ」では、問題や課題を掘り起こし、あるべき姿や将来像を探る研究に着手すること、「研究Ⅱ・Ⅲにむけて」では、様々な観点から課題を設定し、研究の方法を身につけることを目的としている。「研究Ⅱ・Ⅲ」では、研究Ⅰを拡大・深化するとともに、「学ぶ力」を高め、さらには、これまでの学習を総合しながら、自らを生きし現代社会に貢献していく「生きる力」を見出すことを目的としている。異学年による学習のため、2年生は3年生から研究の手法や課題設定の仕方などを学習でき、3年生はリーダーシップが求められることにより、活動に対して意識が向上するなどの良さがある。講座「表現・コミュニケーション」については、後ほど詳述する。

第1学年は第2・3学年で実施する「研究」の系統性・関連性と研究推進の基礎的・基本的事項の学習内容(5講座)に重点を置き、5つのグループごとに1講座4時間単位で前後期1回ずつローテーションし、全ての生徒が全講座受講するようにしている。このグループを単位とした方法は、小集団の中で自分の役割を的確に把握し、行動する力を育成するとともに、集団の中でお互いの関わりを深めていくような支援・指導となるよう留意している。

表1 「総合的な学習の時間」年間指導計画

	前 期						後 期					
	4 月	5	6	7	9	10	11	12	1	2	3	
第3学年	オリエンテーション	社会体験・ボランティア活動	研究Ⅱ(研究の拡大)	表現・コミュニケーション	研究Ⅱ(研究の拡大)	表現・コミュニケーション	表現・コミュニケーション③	表現・コミュニケーション④	研究Ⅲ(研究の深化)	研究のまとめ(ポートフォリオii)		
第2学年		研究活動に向けて	研究Ⅰ(課題設定と基礎研究)	①	研究Ⅰ(課題設定と基礎研究)	②				全体発表会(3年)	研究Ⅱ・研究Ⅲに向けて	
第1学年		オリエンテーション	「研究」に向けた基礎・基本Ⅰ			「研究」に向けた基礎・基本Ⅱ			研究のまとめ(発表会・ポートフォリオi)			

Ⅲ. 講座「表現・コミュニケーション」

昨年度、教科と総合的な学習の遊離を改善し、表現することに焦点を当てた学習の一つとして既存の研究グループを生かした横断的な学習を実施した。異教科によるチームティーチングは、担当している教科の授業の中では普段見られることのない生徒の反応が見られたり、他教科の指導方法から学ぶものが多かったり教官にとって意義深いものであった。しかしながら、運営上、既存の研究グループ担当教官のペアが横断的な学習の担当者とならざるを得なかったため、考案された学習内容がねらいに十分あてはまるものになったとは必ずしもいえなかった。

そこで、本年度は、「表現・コミュニケーション力」にさらに焦点を当て、「口述による表現」「映像を用いた表現」「図や表を用いた表現」「身体をつかった表現」の4つを抽出した。これら言語による表現・非言語による表現をテーマに、表現・コミュニケーション力の育成を主なねらいとした講座「表現・コミュニケーション」を新設した。

1 目的

「研究」は、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力をつけることをねらいにするのに対して、「表現・コミュニケーション」では、「学び方」を学ぶことよりも、表現の方法を学んでいく過程や主体的に自己表現していく中で、自らの生き方を考えさせていくことに重点を置くこととした。講座「表現・コミュニケーション」のねらいは、次の2点である。

- ①主体的・創造的に活動に取り組み、自己の生き方を考えさせる。
- ②生徒の表現・コミュニケーション力を伸ばす。

2 方法

講座「表現・コミュニケーション」は4講座（口述表現・映像表現・図表表現・身体表現）からなる。第2・3学年を既存の研究グループごとに、4講座をローテーションしながら全員が全講座受講するようにした。1講座を4時間（第1次1時間、第2次2時間、第3次1時間）とし、年間16時間実施し、1講座あたり2名の教官（第2・3学年担当の教官が各1名）が指導にあたった。

「表現・コミュニケーション力」を育成するための手だてとして、各教科・領域と同様に講座「表現・コミュニケーション」でも「内的表象を高めさせること」と「相手を意識させること」の2点に着目し指導にあたった。これは「一つ一つのスキルは多種多様でありそれらすべてを教科指導や総合的な学習の時間の中で指導することは簡単なことではないこと」、「スキルを直接的に教え込む指導では、生徒自らが相手や状況に応じて、ふさわしい表現・コミュニケーションができかどうか疑問であること」、「生徒が自らスキルを獲得することによってこそ生きてはたらく『表現・コミュニケーション力』が育成させる」と考えたからである。

3 各講座の概要

(1) 口述表現

講座「口述表現」では、口述を用いた表現場面をいくつか設定し、その場面の中で話術の向上を目指

し、表現力を伸ばし、コミュニケーション力を高められるようにすることをねらいとした。

第1次では、「アナウンサー、ナレーターにチャレンジしよう」というテーマを示し、プロの話し方に学ぶ学習であることを意識づけた。その後、用意したいくつかの課題のビデオを視聴させ、今後の活動のイメージをもたせた上で、自分に合った課題を選択をさせるようにした。「阪神大震災」に関するニュース、スポーツに関するニュース、教育番組のナレーション、学校紹介のナレーションなど、それぞれに目的が異なり、対象や話し方の違いがあるものを準備した。各自の希望をできるだけ生かしながら、課題ごとの3～4人のグループを作らせるようにした。

第2次では、グループごとにもう一度課題のビデオを視聴させ、練習における工夫点について考えさせた。まず、自分の選んだ課題が「何を、誰に対して、どのように伝えようとするものなのか」を考えさせ、そのために

どのような話し方をするのが適切であるか考えさせた。グループごとに話し合いの時間をとり、ワークシートにまとめさせ、その後、発表に向けグループごとに、ビデオデッキ・モニターをできるだけ準備し、繰り返しビデオを再生しながら練習をさせた。限られた時間ではあったが、どのグループも熱心に取り組む姿が見られた。また、練習の途中で、ある程度自信のついたグループには本番を意識させたりリハーサルを行わせ、自分たちの到達度を確認させた。ただ各グループごとに、デッキやモニターなどを準備したり、練習場所を確保したりすることが難しく、課題ごとに教室内の数カ所に分かれ、2、3のグループが同じ場所で同時に練習することとなった。



図1 口述表現（ビデオ視聴）



図2 口述表現（発表場面）

第3次では、全てのグループに発表をさせた。まず評価用紙を配布し、評価の観点を確認させた。「堂々と発表しているか」「声の大きさ・速さ・強弱は適切であったか」「お互いのタイミングなど、グループとしてのまとまりはよいか」の3点について五段階で評価をさせるようにした。また、コメント欄を用意し、できるだけ良い面を見つけて評価するよう促した。順次、課題ごとに発表させながら、発表者以外の全員に評価用紙に記入させるようにし、各グループに対して全員の評価を返すようにした。発表の形式

については、教卓にマイクを数本セットし、音声を小さくしたビデオ画像を見ながら発表するようにした。50分という時間の中で全てのグループが発表するという大変慌ただしい時間ではあったが、ど

のグループも精一杯の発表をしていたようである。自分に返ってきた評価を真剣に見つめる姿も見られたが、さらに意見交流をするところまで時間をとることができなかった。

4時間という限られた時間の実践であり、練習時間も2時間という条件ではあったが、生徒たちは前向きに熱心に取り組んでいたようである。ワークシートの振り返りの欄には、「何気なく聞いているニュースのアナウンサーはとても早口で大変な努力をしているのだと感じた。」「心を込めて読むことを心がけよう。」「淡々と読むのが難しかった。」など、プロの話し手の話し方から、適切な話し方を学ぼうという意識をもって練習に取り組んでいる姿が多く見られた。その点では一定の成果をあげることができたと考える。

(2) 映像表現

講座「映像表現」は、文字情報を映像情報に置換する力を伸ばすことをねらいとした。

第1次は、この「映像コース」での学習の目標と評価の観点及び方法を話すことから始め、自分の中に入ってきた文字情報を頭の中で映像イメージに置き換え、それをアウトプットしていく作業であることを確認した。その後、詩を10編載せたプリントを配布し、映像に置き換えてみたいものを一つ選ばせ、その詩のイメージをふくらませるため、詩から得たイメージを文字に書いてまとめさせた。用意した詩は、10編で、長いものも短いものも含まれているが、どれもある程度の



図3 映像表現（映像編集）

ストーリー性をもつものを選ぶよう配慮した。いくつかの場面をもつ映像を作成することを考えてのうえである。選んだ詩から、基調となる色や明暗、カメラの立ち位置、焦点、聞こえてくる音などをイメージして、文字に書いてまとめさせた。文字情報を元にして広げたイメージを文字情報で表現するのは国語科の時間にやり慣れていることもあり、スムーズに行えた。時間の最後に、イメージのふくらみを文章にまとめることができたかを自己評価し、プリントを提出させた。

第2次は、主にコンピュータによる映像編集の方法を学習させた。生徒たちは技術科や総合的な学習（研究）などを通じてコンピュータに親しんでいることもあり、ほとんどの生徒はすぐに使用法を覚え、自分のイメージにあった映像（動画・静止画）を選び始めていた。今回映像と音楽は著作権フリーの素材を用意し、親コンピュータに保存しておいたものを、ネットワークを通じて生徒が選択し、できあがった作品も親コンピュータに保存するようにさせた。今回は基本的な映像の組み合わせを工夫させるために、原則として5秒の映像6種類を組み合わせ30秒の映像に編集するように指示した。こうして編集された映像に30秒の音楽をつけて作品の完成となる。様々な映像の中からどれを選択するのか、どんな音楽と組み合わせるのかによって大きくイメージは異なってくるため、生徒たちは試行錯誤しながら作業を続けていた。編集作業の最後にはレンダリングとよばれる時間のかかる仕上げ過程があり、待ち

時間があるが、授業時間の終わりにレンダリングに入ることによって時間を有効に使うことができた。

第3次は、これまでに作成した各自の作品を、相互に鑑賞させた。親コンピュータから生徒それぞれのコンピュータに作品のデータを一斉に送信し、各生徒はそれを視聴して、「詩と映像は合っていたか」「詩と音楽はあっていたか」「その人の工夫が見られたか」を三段階で評価し、「どんなイメージを受け

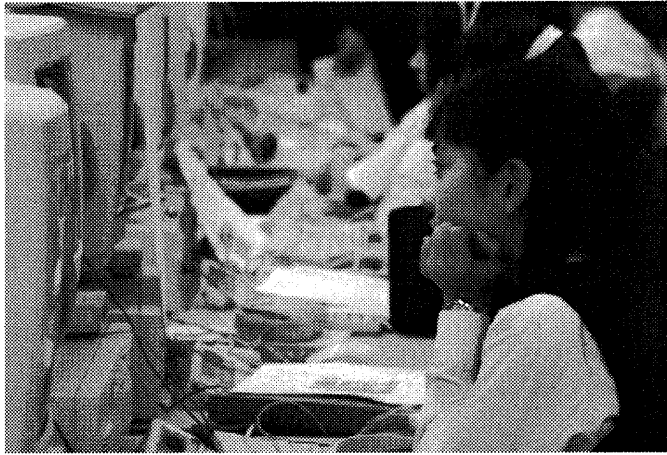


図4 映像表現（評価相互）

たか」を短文で評価表に書き込ませた。それぞれ30秒ほどの作品であり、評価を入れてひとり分約1分をかけながら全員の作品を1時間の中で見ることができた。最後に全コース分が一覧になっている自己評価表で、このコースでの4時間の振り返りを行わせた。この講座の成果として、映像で表現することに対して抵抗がなくなったことをあげることができる。今後は、準備されたコマを選ぶ編集作業だけではなく、身のまわりにある物事の中から映像を取り出す力も育てたいと考える。

(3) 図表表現

講座「図表表現」では、自己PRポートフォリオを作成する過程で、絵図や写真などのレイアウトを工夫し、より効果的に自分自身を表現したり、伝え合うことができるようにすることをねらいとした。

第1次は、課題確認後、自分自身をPRするテーマの決定を主な活動内容とした。指導にあたって、まずこの講座の目的や意義を生徒に伝えるとともに、4時間の活動内容を確認させた後、必要な生徒には、見本を見せたり、ポートフォリオの構成をスケッチするためのフリーペーパーを配付した。なかなか自分史をふり返る機会が少ない生徒にとっての課題提示に戸惑いを見せる生徒もいたが、時間がたつにつれ、少しずつ自分のこれまでの様子を時間をたどって整理しようとする場面が見られ始めた。

第2次は、課題の確認と補足説明後、自己PRポートフォリオの作成を主な活動内容とした。ポートフォリオの表現は、二つ折りのA4版の厚紙をベースにレイアウトし、見開きの2ページを必ず仕上げることを課題とし、作成の見通しをもって活動させた。第1次後、しっかりと自分を表現するテーマを決めて来た生徒が多く、写真や資料などを準備したり、パソコンを使ってレタリングを工夫したり、デジタルカメラで自分の顔写真や作品を撮影したり、マーカーやペンを使ってイラストを描いたり、それぞれが個々の作成計画・目標に向かって様々な取り組みを行っていた。しかし、



図5 図像表現（作品）

まだ自分のテーマが定まらず、資料の準備が出来ていなかったり、構成のイメージが浮かばず、制作活動に入れない生徒もいた。第2次は、2時間続きの授業であるため、第1時から第2時にむけてそれぞれの生徒の準備がととも重要になってくる。

第3次は、発表のポイント（発表側と聴く側双方）確認させた後、講座の生徒を5つのグループに分け、一人5分の持ち時間を与え、作成した「自己PR ポートフォリオ」を使って、自己PRを行わせた。発表の順番は、



図6 図表表現（発表風景）

グループごとで決めさせ、次の発表者が司会進行の役割を行う。「アイコンタクト」でお互いの目と目をしっかりと確認しながら自分の伝えたいことを伝えていくことを特に留意した。ポートフォリオが未完成だったり、自己PRのポイントが十分にまとめきれず、自分の発表が十分に出来なかった生徒も何人か見られたが、ほとんどの生徒が発表に向けて、自分自身を表現するキャッチフレーズなどを工夫し、相手を意識した、相手と効果的に伝え合うポスターセッションができた。

(4) 身体表現

講座「身体表現」ではボディーパーカッションを使って相手に効果的に表現・伝達することによって、表現・コミュニケーション力を伸ばすことをねらいとした。

第1次は、まず学習の目標及び評価の観点と学習の流れを説明した後に、学年・男女などのバランスを配慮して3つのグループに分け、リーダーを決めた。そして、見本となるビデオソフト「ボディーパー



図7 身体表現（テーマ決め）

カッション：手拍子の花束」（約5分間）を視聴して、方向性（できあがりの見通し；共通リズムの確認やアドリブの確認など）を確認し、グループごとに興味・関心をもっている表現しやすいテーマ（アニマル・映画、海・火山など）を決めさせ、4つにパート分けをして練習を行った。その際、各パートに2年生と3年生が必ず含まれるようにパートを構成させた

第2次は、グループごとに練習をした後、全体で発表会のリハーサルを体育館のステージで行った。どのグループもパート練習と全体練習

に取り組みながらうまくまとめていた。

練習の際には、細かな表現指導はせずに、テーマに沿って相手に伝わりやすいかを意識させるようにした。アドリブを考える時間が多く必要であり、また、リハーサル前にリハーサルのリハーサルができ

ているかどうかで仕上がり具合がわかる。指導者と各グループのリーダーとで進捗状況を確認しながら練習を進めさせた。

第3次は、発表会を体育館のステージで行った。発表前に、練習したことを恥ずかしながら表現すること、聴く側は発表者が表現しやすい雰囲気をつくることを伝えた。自分たちのグループの発表が終わったときに、まず自己評価を行わせ、発表がすべて終わった時点で他者評価を行わせた。

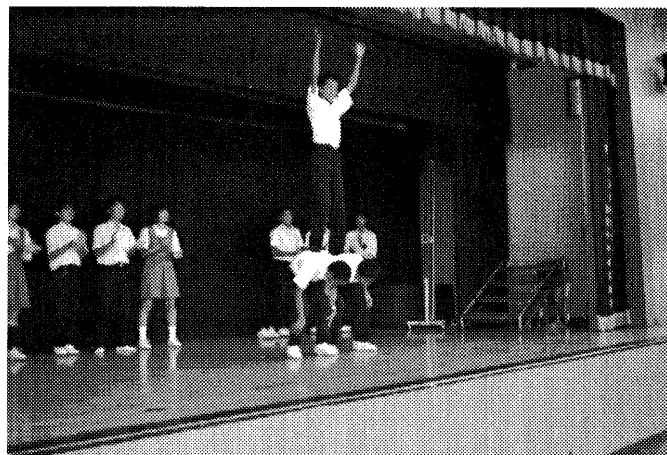


図8 身体表現（発表）

相互評価を最後に実施したが、お互いに評価し合いそれを発表して終わるという形にとどまった。発表会を2回開き1回目を中間発表会とし、相互評価をした中でお互いに出てきたアドバイスをもとに、再度練習をすることで、お互いの高まり合いができるのではないかとと思われる。

4 生徒の反応

4回目の講座に入る前に、第2・3学年の生徒（156名 男子79名、女子77名）に講座に対するアンケートを実施し、生徒の意識をみた。学年や性別によって大きな差は見られなかった。下の図9～図12は、第2・3学年のアンケート結果を示している。

図9は「設問1『表現・コミュニケーションの時間は楽しい』と感じたことがあるか。」についての結果を示している。「感じたことがあった」と答えた生徒は63%、「少しあった」を合わせると93%の生徒が何らかの楽しさを感じていた。

次に、図10は「設問2『表現・コミュニケーションの時間で学習したことがこれからの社会で必要』と感じているか」についての結果を示している。「とても感じている」9%、「感じている」28%、「少し感じている」54%で合計91%の生徒が必要と感じている。

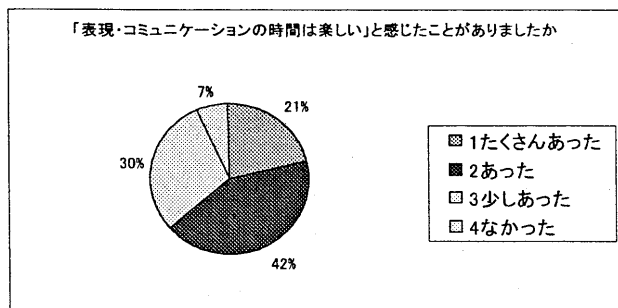


図9 楽しいと感じたか

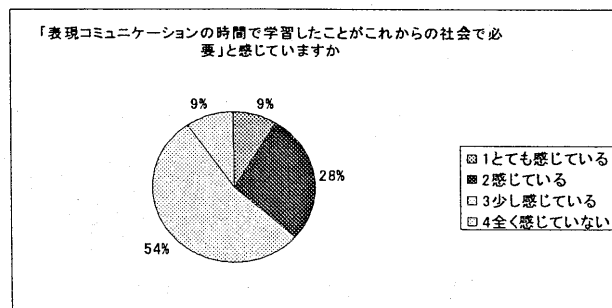


図10 必要と感じるか

図11は「設問3『表現・コミュニケーションの時間はためになる』と思っているか。」についての結果を示している。設問2の結果と大変似通った結果である。「とても思う」と答えた生徒が9%、「思

う」と答えた生徒が28%である。

図12は「設問4『表現・コミュニケーションの時間で学習したことが、生かされた』と感じたことがあったか。」についての結果である。「たくさんあった」1%「あった」13%、「少しあった」27%で合計すると41%である。

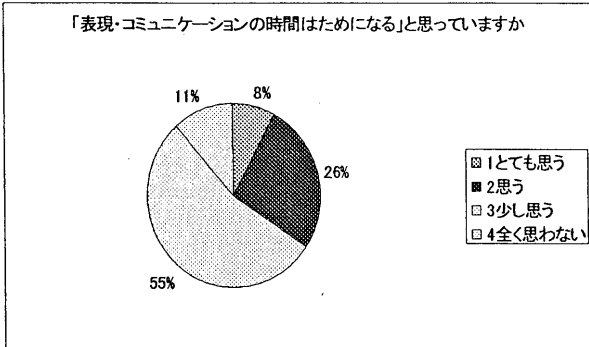


図11 ためになると思うか

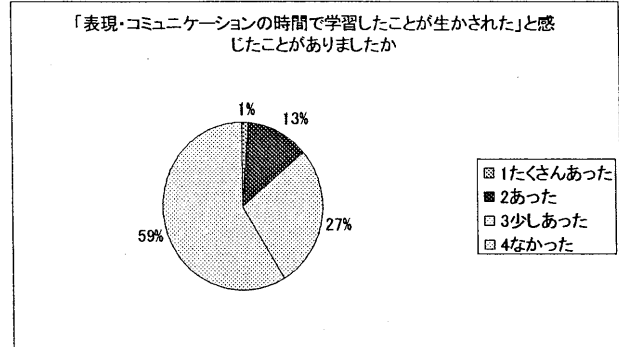


図12 生かされたと感じたことがあるか

図13は「表現・コミュニケーションの時間で学習したことが生かされた」と感じた生徒に対して、その場面をたずねた結果である。「学校外の生活の場面」がもっとも多く、ついで「教科の授業の中」であった。主な意見は「友達とコミュニケーションがとりやすくなった。」「人前で発表するときあまり恥ずかしくなくなった。」「パソコンの使い方がうまくなった」「普通に会話をしているときに身体を使って相手に伝えることができた」「人前で自分の考えをはっきり示すことができた」「人の話を目を合わせて聴くことを意識するようになった」「ノートのとめやレポート提出などに役だった」などである。

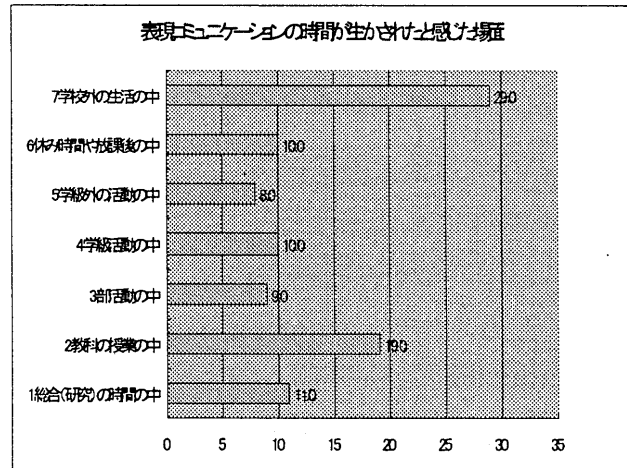


図13 生かされたと感じた場面

5 考察

講座を終えてからの時間的な経過が少ないため、この結果をそのまま本講座の結果として捉えることには無理があるが、現時点における考察を行う。

「口述」「図表」「映像」「身体」というスキルに分けて、講座を開設したことによって、バランスよくスキルを実行させることができたと考える。しかも、それらの活動は、図9に示すように、生徒自身が楽しい活動と感じるものとなっている。人に対して表現することや人とコミュニケーションすることが楽しいと感じたことは、今後の生活の中で、生きてはたらくエネルギーとなると考える。

これら4つの講座の大きな特徴は、スキルを直接教えるのではなく、「内的表象を高めさせる」「相手を意識させる」状況を設定したことにある。このことで、生徒自らが表現コミュニケーションする方法

を考え生きてはたらく「表現・コミュニケーション力」の育成につながると考えた。実際、図 10 に示すように、多くの生徒が「これらの講座で学習したことが今後の社会生活で必要になる。」と感じている。4つの講座内容や運営方法のあり方を今年度検討し、設定できたことは大きな成果である。

しかしながら、教師側の講座「表現・コミュニケーション」に対する必要感と生徒の必要感にまだまだ差がある。我々は、この講座「表現・コミュニケーション」は、教科や従来行ってきた総合的な学習の時間では十分に育成できなかった「表現・コミュニケーション力」を育成するためになくてはならない時間と捉えている。したがって、図 10 における「とても必要と感じる」「必要と感じる」や図 11 における「とてもためになる」「ためになる」と答える生徒がそれぞれ 50%を越えるような講座の内容に改善していかなければならない。また、図 12 に示すように、講座で学んだことが生かされたと感じている生徒が少ない。調査の時期が講座終了から近かったこともその原因の一つに考えられるが、講座の内容・運営など改善の必要があると謙虚に受け取る必要がある。

改善の視点の一つとして、講座内での評価活動のあり方が考えられる。4講座とも、生徒の自己評価や相互評価を行う場面を設けて、自分たちの表現・コミュニケーションを見直す機会を設けているが、いずれも取り組みの最後に評価を行うようになっており、その評価をふまえた自己の表現・コミュニケーションを改善するか否かは個人任せの状況である。1講座を終えて、発表した後の相互評価や自己評価したことが、フィードバックされた活動を入れることによって、より充実した講座になると考える。また、教師の支援のあり方も工夫していく必要がある。表現・コミュニケーションの場を設定しているが、その後の活動が生徒任せになっていることがある。生徒が主体的に表現・コミュニケーションしているかどうかを適宜把握し、実際にその道のプロフェッショナルに来ていただくことも視野に入れながら、適切な指導をいかに入れていくのか研究・実践していく必要がある。

図 13 の講座の学習が生かされたと感じた場面で、学校外がもっとも多く、総合的な学習の時間（研究）や教科の中で生かされたと感じている生徒は少ない。表現・コミュニケーション活動はあらゆる場面で必要となる。また、学校という閉じた空間の中でしかはたらかないような表現・コミュニケーション力は意味がない。そういう意味では、学校外で生かされたという結果は望ましい結果である。しかし、我々は、総合的な学習の時間と必修教科、選択教科は有機的に作用すると考えている。必修教科・選択教科・総合的な学習の時間（研究）・総合的な学習の時間（講座「表現・コミュニケーション」）との関連について、更に研究を継続し学校全体のカリキュラムについても検討をしていく必要がある。

IV. 終わりに

以下の5点に留意しながら、今後も実践を継続させていきたい。

- (1) 「表現・コミュニケーション力」の育成を目指した授業実践ができ、基礎資料をえることができたので、これをもとにしながら、より充実した授業展開を考えること。
- (2) 「内的表象を高めること」「相手を意識させること」の2点に関する理論研究と実践的研究を進めること。
- (3) 講座「表現・コミュニケーション」と教科や領域との関わりを明確にしていくこと。

- (4) 教室や機材，ソフトなどの物的な環境を充実させていくこと。
- (5) 表現・コミュニケーションに関する教師のさらなる研修を行うこと。

引用・参考文献

黒瀬基郎ほか，「明日を担う生徒を育てる学校教育の創造（3）」，広島大学附属東雲中学校研究紀要『中学教育』第35集，2003。

千葉大学教育学部附属中学校，第40回教育研究会要項，2003。

文部省指導資料『新しい学力観に立つ教育課程の創造と展開』，東洋館出版，1993。